様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２６ 年　 ６ 月 １０ 日現在

機関番号：１５４０１
研究種目：挑戦的萌芽研究
研究期間：2011～2013
課題番号：２３６５３２６９

研究課題名（和文）能力開発の観点から見た留学成果の測定に関する研究

研究課題名（英文）Research for Measuring Effects of Study Abroad on Competency Development

研究代表者
黒田　則博（Kuroda, Norihiro）

広島大学・教育開発国際協力研究センター・教授

研究者番号：８０２７４１４０

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　2,500,000円、（間接経費）　750,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、留学の成果を個々の留学生の能力（competency）向上の観点から測定しようとするもので、広島大学に1年以上在学する留学生にアンケート調査を行った。以下のような留学の効果の新たな側面が明らかになった。1）大学でより身につきやすいと思われる「知識」や「技能」よりも、責任感、寛容さ、科学技術への信頼など「態度」や「価値]の向上・変化が大きいと感じている。2）授業やゼミなどの大学が提供する活動よりは、レポート・論文作成など主体的な活動が能力向上に最も貢献したと評価している。3）留学中の日常生活も能力向上に大いに関わっており、特に価値の変化については、大きな意味があるとしている。

研究成果の概要（英文）：This research is intended to measure effects of study abroad on competency development. A questionnaire survey was conduted to international students in Hiroshima University who have studied there for a year or more. Some interesting findings of effects of study abroad are hilighted below.
1) It is perceived that "attitude" and "value" such as "resposibility", "tolerence" and "belief in science and technology" have been more developed than "knowledge" and "skill" which universities are supposed to provide. 2) Independent activities such as report and thesis writing are said to be more contributing to competency development than other activities including lectures and semianrs organized by university. 3)They have answered that daily life also plays an important role in competency development particularly in value formation and change.

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：教育学・教育社会学

キーワード：留学の成果　Competency

１．研究開始当初の背景

我が国では 1983 年のいわゆる「留学生受入れ 10 万人計画」以来、文部科学省の「国費外国人留学生制度」を中心に外国人留学生受入れが国策として展開されてきた。また近年これに加え、外務省の「人材育成研究支援無償」や国際協力機構（JICA）のいわゆる「長期研修生制度」や「留学生借款」など、より発展途上国側のニーズに沿った事業も開始されるようになった。

このような留学生受入れ政策の進展に伴って、今日、その成果をどう評価するかが大きな政策課題となっている。しかし、特に国費外国人留学生制度の場合に顕著であるように、それぞれの事業の目的･目標が、あまりにも曖昧かつ一般的であったり、あるいは多岐にわたっていたりして、そもそも始めから具体的な形で成果を測定するのに馴染まない形で設定されている。もちろん例えば、事後的により具体的な目標を設定して、なんとか目に見える形で留学の効果を測定しようする努力がなされてこなかったわけではないが、必ずしも十分な成果を上げるには至っていない。

そこで本研究では、従来おうおうにして単に学位の取得をもって留学の成果とされてきたが、具体的な各種の能力の開発という観点から、留学成果の測定手法を開発し、そしてその適用を試みた。このような発想に至った大きな手がかりが Competency の概念であった。これは 1970 年代以降アメリカで発展してきたもので、職務遂行に当たって必要とされる能力を分析し、それに基づき職務遂行能力を測定しようとするものである。本研究はこれを援用し、日本留学によりどのような具体的な能力開発が期待されているかを個々の留学生に即して分析し、それに沿って留学の成果を測ろうと試みた。ここでは、能力を単に知識のみならず、思考能力、価値観、意欲、信念など多様な広がりと深さを持つものとしてとらえている。

さらに本研究では、留学中のどのような活動がこの能力開発に関わっているかについても調査分析を行った。その際、大学での講義等の通常の大学での活動以外にも、課外活動など幅広いものを含める。

このような具体的な能力の開発は、今日、competency based education として大学教育においても注目されるようになっているが、留学の評価にこれを取り入れるのは本研究が初めてであり、今後の留学の成果に関する研究の射程を大きく広げるものと期待される。また、実際の留学生事業の評価にも有益な手段を提供する。なお本研究は、黒田が 2007 年に行なった予備的な作業を本格的に発展させたものである。

２．研究の目的

本研究は、1970 年代以降アメリカを中心に開発されてきた Competency の概念を援用しつつ、具体的な各種能力の開発という観点から留学の成果を測定する方法を開発し、それを適用して日本で学ぶ留学生を対象に、留学の成果の測定を試みる。この測定方法の開発を行なうに当たってはまず、具体的に留学によりどのような能力の開発を期待しているのかを、個々の留学生に即して分析する必要がある。この際、能力を単に知識のみならず、思考能力、価値観、意欲、信念など多様な広がりと深さを持つものとしてとらえる。加えて本研究では、留学中の多様な活動のうち、どのような活動がこのような能力開発に関わっているかについても調査分析を行なう。

３．研究の方法

本研究は概ね、以下のような手順・方法で実施した。対象は研究の時間的、経費的な制約から、広島大学で 1 年以上学んでいる留学生とした。「1 年以上」としたのは、

本研究は留学の成果を評価するものであるので、そのためには一定期間の日本での勉学が必要と考えたためである。

（１）質問票の作成(1)：平成 23 年度には、各種文献を基に留学を通じて身につけるべきだと思われる Competencies を抽出するとともに、これらに関し、広島大学の留学生を対象として実際にどれ程重要と評価されているかを調査した。平成 24 年度にはその結果に基づき、比較的重要とされなかった数項目を削除するとともに、理解しにくいとコメントがあった項目の表現を分かりやすいものにし、調査票を作成した。

（２）質問票の作成（2)：調査票は、1）対象となる留学生の属性や特性に関する項目（性別、国籍、在籍年数、受給奨学金等)、2）上記のそれぞれの Competency が身についた度合いに関する自己評価（0～4 で評価)、3）Competencies の開発に有益であったと思われる学内外での活動に関する評価（0～4 で評価）の 3 グループの質問からなっている。

（３）調査の実施：平成 24 年 12 月から平成 25 年 1 月にかけて、広島大学に 1 年以上在学している 714 名の留学生を対象に調査票を配付(原則的対象学生に直接配付)し、288 の有効回答を得た（40%)。なお、平成 23 年度の予備調査で、外務省の「人材育成研究支援無償」など特定の目的を持った留学生と、それほど目的が特定されていない文部科学省の国費留学生などとの間に、各 Competency の重要度評価に大きな違いがみられのなかったので、両グループを対象とすることとしたが、独立変数として奨学金の違いを含めた。

（４）調査データの集計と分析：平成 25 年度には、SPSS を使用して上記の質問項目への回答を単純集計するとともに、クロス集計や重回帰分析等を行った。

４．研究成果

（１)結果の公表：上記の分析結果を基に、7 つの大学で留学生を交えた成果発表・検討会を開催し、その解釈等について検討を行った。これを踏まえ研究成果を、研究論文「能力開発の観点から見た留学の効果に関する研究－広島大学の留学生を事例として－」(『国際教育協力論集』2013 年 10 月、第 16 巻第 1 号）として公表した。併せて、データの再分析が可能なように、本研究の「データ集」を紙媒体及び電子ファイルで作成した。さらに、2014 年 7 月には日本比較教育学会で成果を発表予定。

（２）主なファインディングス

1）能力を「知識」、「技能」、「態度」、及び「価値」の 4 分野に分けてみると、「態度」や「価値」の面での向上・変化が、「知識」や「技能」よりも大きいと感じている。

2）特に知識の分野では、「専門分野の学問的知識」以外の一般教養や日本に関する知識などは、あまり的向上しなかったと答えている。

3）一方で、責任感（態度)、寛容さ（態度)、科学技術への信頼（価値）などが大いに高まったと答えている。

4）いずれの分野においても、期待したほどほど能力は向上していないと感じている。

5）留学中の活動全体として能力向上に貢献したと評価されている。

6）授業やゼミなどの大学が提供する活動よりは、レポート・論文作成など主体的な活動が能力向上に最も貢献したと評価している。

7）留学中の日常生活も能力向上に大いに関わっており、特に価値の変化については、特に大きな意味があるとしている。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計　1　件）

１．<u>黒田則博</u>（2013)「能力開発の観点か

ら見た留学の効果に関する研究－広島大学の留学生を事例として－」（『国際教育協力論集』第 16 巻第 1 号、73－87 頁（査読無し）。
（ http://home.hiroshima-u.ac.jp/cice/?p=2428 参照）

〔学会発表〕（計　9　件）
１．Kuroda, N. Questionnaire Survey for “ A Study on Effects of Study Abroad on Competency Development”、「留学生を交えた留学効果検討会」（早稲田大学、筑波大学、広島大学（2 回）、大阪大学、鳴門教育大学、神戸大学、東北大学、計 7 大学 8 回）（2013 年）
２．黒田則博「能力開発の観点から見た留学の効果に関する研究－広島大学の留学生を事例として－」、日本比較教育学会（2014 年 7 月 12 日、名古屋大学）

〔図書〕（計　0　件）

〔産業財産権〕
○出願状況（計　0　件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計　0　件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等
１．上記論文は、
（http://home.hiroshima-u.ac.jp/cice/?p=2428）に掲載。
２.「能力開発の観点から見た留学成果の測定に関する研究」データ集（4 分冊、1889 頁）

６．研究組織
(1)研究代表者
黒田　則博　（Kuroda, Norihiro）
広島大学・教育開発国際協力研究センター・教授

研究者番号：80274140

(2)研究分担者
(　　)

研究者番号：

(3)連携研究者
(　　)

研究者番号：